
研究報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 8
P.2- 8 (2020)

母性看護学・ウィメンズヘルスにおける アクティブラーニングに関する文献レビュー

Literature Review regarding Active Learning in Maternal Nursing and Women's Health

古川亮子*
FURUKAWA Ryoko

西野友子*
NISHINO Tomoko

要 旨

看護基礎教育における母性看護学・ウィメンズヘルスの学習は、学習内容の特殊性により画一的な教育のみでは学生の理解を深められず、様々なアクティブラーニングを導入し教育方法を模索している。そこで本論文では先行文献（13編）を分析することにより、看護基礎教育における母性看護学・ウィメンズヘルスに関するアクティブラーニング（AL）の現状を把握した。その結果、最も多いALの方法はチーム基盤型学習、グループワークやロールプレイングであった。ALの学習効果として、肯定的な学生の意見・反応は「学習理解が深まる」「グループワークによる肯定的な意見・反応」「学習意欲が高まる」「学内での学習が実習で生かせる」、否定的な意見・反応は「グループワークに関する意見・反応」「（学生への）負担が大きい・時間がかかる」「学習不足」「事前学習を行わない」などがあつた。ALの課題として「ALの内容」「教員」「教育設備」「教育機関全体」が挙げられていた。ALの実施にあたっては学習内容や方法、教員の時間や労力、学生の特徴、教育設備などを踏まえた十分な準備が必要であり、臨機応変に学習方法を検討する必要があるだろう。

索引用語：母性看護学、ウィメンズヘルス、アクティブラーニング

Key words：Maternal nursing, women's health, active learning

1. はじめに

我が国の看護基礎教育は、現在の社会情勢の変化に伴う学生や看護の対象者の生活や特徴の変化、医療体制の変化に応じて随時検討されている。厚生労働省の最新の看護基礎教育検討会報告書¹⁾においては、看護学生の人間関係の希薄化や生活体験不足、コミュニ

ケーション能力不足などが問題とされる一方、タブレットやパソコン等の電子機器の扱いに慣れているなどの特徴が挙げられている。また看護の対象の変化としては少子高齢化や対象の多様性・複雑性が指摘されており、看護教員にはより高い能力が求められてきている。そのため、厚生労働省では柔軟なカリキュラム編成や学生が主体的に学ぶことができる教育方法を推進しており、看護教育機関では個々の教育環境により画一的な看護教育の提供だけではなく、各機関の教育方法の検討が必要である¹⁾。

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*
(Nov. 8, 2019 原稿受付) (Jan. 31, 2020 原稿受領)

また看護教育の内容は、教育機関だけではなく専門領域によっても特徴がみられている。特に母性看護学領域（母性看護学・ウィメンズヘルス）の学習では、少子化の影響から実習場や受け持ち患者の受け入れがますます難しい、生活体験不足により学習内容のイメージがつきにくい、学習内容の特殊性より好悪が偏る傾向にあるといった問題が生じている。このような現状を踏まえ、本論文は看護学生が母性看護学に関してより主体的に理解しやすい学習環境を検討するため、現在の日本で行われている母性看護学・ウィメンズヘルスに関するアクティブラーニング（以下ALと略す）の現状を把握することとした。

II. 研究方法

2019年9月3日現在、医学中央雑誌 Web、CiNii、CINHAHL、PubMed、Google Scholarで日本の看護基礎教育（助産学課程や大学院教育、会議録は除く）に関して、「母性看護学」「ウィメンズヘルス」「maternal nursing」「nursing education」「アクティブラーニング」「active learning」「nursing students」というキーワードにて検索を行った。論文の分析は質的記述的にNVivo 12を用いて行った。

III. 研究結果

1. 対象論文

検索した結果、29編の論文が抽出された。そのうち、重複した内容の論文や内容が母性看護学領域に特筆していないものを除き、13編²⁻¹⁴⁾を対象論文とした（表1）。論文の種類は、原著2編²⁻⁶⁾、研究報告2編³⁻⁵⁾、実践報告2編⁸⁻¹¹⁾、報告3編¹⁰⁻¹²⁻¹³⁾、短報1編⁷⁾、その他（解説・特集）3編⁴⁻⁹⁻¹⁴⁾であった。出版年は、2018年が5編²⁻⁶⁾、2017年⁷⁻⁹⁾と2016年¹⁰⁻¹²⁾が各3編、2010年¹³⁾と1999年¹⁴⁾が各1編だった。

2. アクティブラーニング（AL）の実際

ALについて1編内で複数のALについて記述しているものがあるため、論文の総数と分析結果の総和が一致しない場合がある。

ALを受けた対象者は、大学生12編（1年生1編、2年生6編、3年生6編、3～4年生1編）²⁻⁵⁻⁷⁻¹⁴⁾、専門学校生（3年生）1編⁶⁾であった。ALを実施した講義は、講義8編（うち概論・ウィメンズヘルスは3編）²⁻⁴⁻⁸⁻¹⁰⁻¹²⁻¹⁴⁾、演習（演習中の講義を含む）5編⁴⁻⁵⁻⁷⁻⁹⁻¹¹⁾、実習2編⁴⁻⁶⁾だった。AL実施の際、母性看護学領域の教員以外の助力を受けたのは4編⁴⁻¹⁰⁻¹¹⁻¹⁴⁾だった。

ALの方法については論文著者のALについての意向を踏まえ、論文に記載されている方法をそのまま表している。多い順にチーム基盤型学習（Team Based Learning；以下TBLと略す）5編²⁻⁵⁻⁸⁾、3編ずつみられたものはグループワーク⁴⁻⁹⁻¹⁰⁾とロールプレイング⁴⁻⁹⁻¹¹⁾、1編ずつみられたものは問題基盤型学習（Problem Based Learning；以下PBLと略す）¹³⁾、Project Based Learning⁹⁾、Inquiry Based Learning（以下IBLと略す）¹⁴⁾、協同学習³⁾、シミュレーション⁴⁾、ディベート¹²⁾、教員作成のDVD教材による自己学習⁴⁾、パフォーマンス課題学習⁹⁾、Webによる自己学習システム（WEBクラス）⁴⁾、サブワークノート³⁾があった。

3. ALの学生への効果

ALの評価方法は、質問紙・評価用紙7編²⁻⁴⁻⁶⁻⁸⁻¹²⁻¹⁴⁾、ピアレビュー3編⁴⁻⁹⁻¹⁰⁾、期末試験結果2編⁴⁻¹⁴⁾、1編ずつはディスカッションの振り返り¹¹⁾、ミニッツペーパー¹¹⁾、フォーカスグループインタビュー⁷⁾、インタビュー（個人）³⁾、ポートフォリオの感想¹³⁾、授業評価⁴⁾だった。

ALの学習効果で、ALの受け手である学生の肯定的な意見・反応は全ての論文²⁻¹⁴⁾、否定的な意見は10編²⁻³⁻⁵⁻⁸⁻¹⁰⁻¹²⁻¹⁴⁾にみられた。また、ALの提供者である教員・指導者の肯定的¹¹⁻¹⁴⁾または否定的¹³⁻¹⁴⁾な意見はそれぞれ2編にみられた。学生の肯定的な意見・反応

表 1 母性看護学領域におけるアクティブラーニングに関する文献一覧（出版が新しい順に記載）

著者（出版年）	論文の種類	対象者	アクティブラーニングの教科と方法
山波・土居・加納（2018）	原著	大学生	ウィメンズヘルス看護学Ⅱ：チーム基盤型学習（Team Based Learning; TBL）
木野・田尻・日隈（2018）	研究報告	大学生	母性看護学方法論Ⅰ・母性看護学方法論Ⅱ：サブワークノートを利用した協同学習
松原・田中・柳本・他（2018）	その他（解説）	大学生	<ul style="list-style-type: none"> ・ウィメンズヘルス概論：WEB クラス、テーマ別課題学習 ・母性看護学方法論Ⅰ・Ⅱ：ウェブによる自己学習システム、DVD 教材、シミュレーション授業、グループ学習 ・母性看護学実習中の学内演習：DVD を活用したグループ討議、ロールプレイ
中村・宮内・佐藤・他（2018）	研究報告	大学生	母性看護学演習：TBL（Team Based Learning）
横山・川上・三島（2018）	原著	専門学校生	母性看護学実習：チーム基盤型学習法（Team-based Learning; TBL）
飯田・五十嵐・新福（2017）	短報	大学生	周産期看護学実習を終えた学部生：チーム基盤型学習（Team-Based Learning）
増田・高島・青柳・他（2017）	実践報告	大学生	周産期看護学（基礎）（実践方法）：Team-based learning（TBL）
福山（2017）	その他（解説・特集）	大学生	母性看護学援助論Ⅱ：ロールプレイング、グループワーク、パフォーマンス課題、Project Based Learning（PBL）
有森・桐原・石田・他（2016）	報告	大学生	母性健康支援看護論：グループワーク
岡山・立岡（2016）	実践報告	大学生	育成期母性看護学：ロールプレイング
中尾・吉留・井上・他（2016）	報告	大学生	母性看護学ケア論Ⅱ：ディベート
志賀（2010）	報告	大学生	母性看護学方法論：Problem based learning（PBL）
三枝・大平・村本（1999）	その他（特集）	大学生	母性看護学方法Ⅰ：Inquiry Based Learning（IBL）

で最も多いものは、「学習理解が深まる(9編)²⁻⁶⁻⁸⁻¹¹⁻¹²⁻¹⁴⁾」と「グループワークによる肯定的な意見・反応(9編)²⁻⁵⁻⁷⁻⁹⁻¹²⁻¹⁴⁾【様々な視点・意見が得られた(6編)²⁻⁴⁻⁸⁻⁹⁻¹²⁻¹⁴⁾】【協調性が得られる(4編)⁴⁻⁵⁻⁷⁻⁸⁾】【コミュニケーション力の向上(2編)²⁻⁵⁾】などであった。また、「学習意欲が高まる(5編)²⁻³⁻⁵⁻⁶⁻⁸⁾」「学内での学習が実習で生かせる(5編)⁵⁻⁷⁻⁹⁻¹¹⁾」「思考力が身につく(4編)⁴⁻⁵⁻⁸⁻¹²⁾」「楽しい(4編)⁴⁻⁶⁻⁸⁾」「主体的に取り組める(3編)²⁻⁵⁻¹²⁾」「自己学習に取り組める(3編)²⁻³⁻⁸⁾」などがあつた。1編にみられたものは、「対応力がつく」¹²⁾「自分で調べる力がつく」⁵⁾「リフレクションに役立つ」³⁾「教員に認められる」²⁾であった。

学生の否定的な意見・反応で最も多いものは「グループワークに関する意見・反応(7編)²⁻³⁻⁵⁻⁷⁻⁸⁻¹²⁻¹³⁾」で、【グループメンバーに対する不満(5編)²⁻³⁻⁷⁻⁸⁻¹²⁾】【発言が苦手・少ない(2編)¹²⁻¹³⁾】、各1編ずつにみられたものは【事前学習を行わない】³⁾【グループワークができなかった】³⁾【あまり参加できず物足りない】¹²⁾【グループ活動が苦手】²⁾【ピア評価についての抵抗が大きい】⁵⁾であった。また、「(学生への)負担が大きい・時間がかかる(2編)²⁻¹²⁾」「学習不足(2編)⁶⁻¹⁴⁾」などがあつた。1編にみられたものは、「正解が提示されないので不安」¹⁰⁾「より具体的または事前に学びたかった」⁷⁾「内容によって学生が実習で活用できる状況でない」⁶⁾「やることが不明瞭」²⁾「つまらない」⁸⁾「あまり受講したくない」⁸⁾であった。

教員・指導者の肯定的な意見は「(実習前の)学生の現状の理解ができた」¹¹⁾「単元の目標がほぼ達成されていた」¹⁴⁾、否定的な意見は「ALによる学生への効果が期待したものではなかった(用語の正確な理解や討議の不十分さ)」¹³⁻¹⁴⁾であった。

4. ALの課題

ALの課題は全ての論文²⁻¹⁴⁾に記載されていた。そのうち学生に関する課題は6編²⁻⁴⁻⁸⁻¹²⁻¹³⁾あり、ALの内容

として「学生の特徴への配慮(事前学習をする学生としない学生の差、グループワークが苦手な学生、グループワークやディベートで発言することに抵抗がある学生など)(6編)²⁻⁴⁻⁸⁻¹²⁻¹³⁾」、¹⁾「学生のグループ編成の難しさ(4編)²⁻⁴⁻⁸⁻¹²⁾」、²⁾「個々の学生への関わり(グループワークをしながらも個々の学生の学習を促進する関わりの必要性など)(3編)²⁻⁴⁻¹³⁾」がみられた。学習環境の課題は全論文に記載されていたが、内容は主に4つ(ALの内容、ALを実施する教員、教育設備、教育機関全体に関する課題)に分けられた。最も多い課題はALの内容についてであり(12編)²⁻¹⁰⁻¹²⁻¹⁴⁾、【AL実施前の準備(事前学習)】や【学生への効果と負担の両方を考慮したALの内容・種類・頻度】、【ALの評価の検討】が挙げられていた。次いで多かったものは教員に関する課題(6編)⁴⁻⁶⁻⁹⁻¹¹⁻¹³⁾で、ALを準備・実施するための「マンパワー」や「協力者との協同・交流の強化」、「ALの教育効果を高めるための教員の臨床実践能力や熱意」などが挙げられた。教育設備に関する課題(3編)⁴⁻⁹⁻¹⁰⁾は、「ICT環境(YouTubeや電子書籍などWebサイトが利用できる)」、「DVDやホワイトボード、書籍が利用できる環境である」が挙げられていた。また教育機関全体として、「教育機関全体でのカリキュラム、学習環境の整備、教育支援者配置、研修会等組織などの取り組みなどの充実」(1編)¹⁰⁾があつた。

IV. 考察

1. 母性看護学・ウィメンズヘルスにおけるALの実際
経済産業省は2017年に「人生100年時代の社会人基礎力」として、3つの能力と12の能力要素【①前に踏み出す力(action):主体性、働きかけ力、実行力、②考え抜く力(Thinking):課題発見力、計算力、想像力、③チームで働く力(Teamwork):発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力】¹⁵⁾を示している。この社会人基礎力の全ての能力は看護職においてもとても重要な要素であり、

かつ医療職という専門知識や技術の修得が必要になる。特に看護大学の場合は、看護教育と学士教育の両方が必要となり、既存の知識・技術に加え社会や医療の変化に伴う情報収集および理解も必要となってくる。そのため、文部科学省に設置されている中央教育審議会では、2008年に学士課程教育の教育方法の改善として双方向型の授業や学生が能動的・主体的に参加する授業の必要性¹⁶⁾を、2012年には求められる学士課程教育の質的転換として能動的学修（アクティブ・ラーニング）の重要性¹⁷⁾を述べ、従来の大学教育の見直しが必要であると示唆している。上述した看護基礎教育検討会報告書¹⁾にも、現在の大学生の特徴を踏まえつつ必要とされる看護基礎教育の見直しの必要性が述べられている。

今回、母性看護学領域におけるアクティブラーニングの現状について先行文献13編の分析を行った結果、ほとんどの文献（11編）²⁻¹²⁾は2012年の中央教育審議会の答申が出された後に出版され、対象となる学生はほとんどが大学生であり（12編）、文部科学省の大学教育方法の考えに従い看護教育方法を検討・実践されたことがうかがえる。また、Van Amburghらが示したActive Learning Inventory Toolで示されたALの複雑さ（高い・中程度・低い）¹⁸⁾を基に本研究で使用した論文で示されたALの種類をみると、主に中程度～高い複雑性のアクティブラーニングが実施されていることが分かった。特に学生個人よりもグループで学びを深める方法や、母性看護学の対象者（妊産褥婦・新生児）のイメージ化を高める方法が工夫されており、これらの傾向は看護基礎教育の中でも特殊性の強い母性看護領域の学習であり、少子化や人間関係の希薄さや生活体験の不足を補うために適切な学習スタイルだったためと考えられた。

2. 母性看護学・ウィメンズヘルスにおけるALの学生への効果

実際に学生へのALの学習効果は相反する意見（肯定的・否定的の意見・反応）があったが、肯定的な意見・反応は否定的なものよりも多くみられていた。全体的にはALにより学習理解が深まる、学習意欲が高まる、思考力が身につく、主体的に取り組めるなど、中央教育審議会の答申で示されていた教育の質的転換の効果がみられていた。また看護学における重要な学びのポイントである学内での学習・演習と実習との関連性、協同や対象者の理解についても、特にチームで行うALではその効果が高められていた。具体的には、母性看護学実習では対象者の少なさや選定の難しさ、ペア実習や受け持ち期間の短さなどにより、実際に受け持ち患者を持つことができないこともあるため、対象者が見つかり次第、速やかに学内での知識・経験を生かしていかなければならない。そのため、学内と実習場での学習が継続的に行われより学習の理解につなげることができたことは、カリキュラム全体に関わる段階的な学習効果がみられたのではないかといえる。その他に、グループによる学習では現在の学生が苦手な協調性やコミュニケーション力の向上につなげることができており、看護のみならず社会人基礎力を習得する一つの機会にもなったのではないかと察せられる。しかし、否定的な意見としてALは負担が大きく時間がかかる・学習不足がみられており、学生のカリキュラム（他の授業スケジュールと課題との調整など）やALのみで補えない知識・技術の支援の必要性も明らかになった。特にグループによる活動ではグループメンバーに対する不満や発言が苦手といった学生の個性による問題もあり、グループのみならず個別な関りも必要であることがうかがえた。

3. 母性看護学・ウィメンズヘルスにおけるALの課題

ALによる学習効果を上げるためには、学生個人が学習を促進するような働きかけが重要である¹⁹⁾。ChickeringとGamsonは、学士教育における優れた実

践のための7つの原則として①教員と学生のコンタクト、②学生間の協同、③能動的な学習、④迅速なフィードバック、⑤学習時間の確保、⑥学生への高い期待、⑦多様な才能と学習方法の尊重²⁰⁾を挙げている。この原則を本論文で引用した文献に照らし合わせてみると、ALの効果と課題から①～⑦のすべてが反映されていることが分かった。ただし、母性看護学・ウィメンズヘルスにおけるALがより学生の教育に効果的なものになるためには、ALを実施する際の課題について検討していく必要がある。本分析により導き出されたALの課題としてまず挙げられるのは、ALによる学生への効果に応じて学生への配慮の必要性が指摘されていた。またALを実施するための課題としてALの種類、ALの内容、実施する教員数・負担、教育設備などがすべての論文で挙げられており、ALの実施にあたり教員のAL準備から実際・評価まで従来通りの講義と比べ、教員の時間・労力・熱意が必要となることが明確となった。加えて、学内の教育設備としてICT環境の整備も課題として挙げられている。総務省は教育・医療の分野におけるICT化の推進を図っており²¹⁾、ICT環境の整備により実施できるALの幅を広げる可能性がある。しかし、ICT環境が整ったとしてもICTを使いこなせるかどうかが重要で、生まれたときからICTが当たり前にある現代の学生よりも教員がICTを使いこなせない場合もあるだろう。よって、ALの計画段階において学内のICT環境や学生・教員双方のICTへの理解・利用状況を検討することも必要である。

V. 結論

現在の母性看護学領域におけるALの実際を把握することで、現在の学生の特徴を踏まえながらより効果的に特徴のある対象者の理解を行っていく学習方法について検討を行った。ALには様々な種類があるが、ALの実施にあたっては学習内容や方法、教員の時間や労力、学生の特徴、学内での設備を踏まえ十分な準備

が必要である。またALの学生への肯定的な学習効果は明らかであるが、否定的な学生の反応・意見もあるため、ALのみの学習にこだわらず臨機応変に学習方法を検討する必要があるだろう。

引用文献

1. 厚生労働省(2019.10.15):看護基礎教育検討会報告書 <<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>>
2. 山波真理,土居岸悠奈,加納尚美:チーム基盤型学習(TBL)を導入したウィメンズヘルス看護学の授業評価学生からの評価による学習効果の検討,茨城県立病院医学雑誌,35(1),1-10,2018.
3. 木野寛子,田尻后子,日隈ふみ子:サブワークノートを用いた協同学習の教育的効果,保健医療技術学部論集,(12),53-65,2018.
4. 松原まなみ,田中千絵,柳本朋子,他:看護学生の学士力を育てるための授業母性看護学教育におけるアクティブ・ラーニングの取り組み,聖マリア学院大学紀要,9,31-37,2018.
5. 中村幸代,宮内清子,佐藤いずみ,他:母性看護学におけるTeam Based Learning(TBL)の導入に関する分析と評価,母性衛生,58(4),655-663,2018.
6. 横山洋子,川上佐代,三島真由美:母性看護学実習での事前学習の改善学内実習を活用した取り組み,中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌,13,83-86,2018.
7. 飯田真理子,五十嵐ゆかり,新福洋子:チーム基盤型学習(Team-Based Learning)と実習とのつながり周産期看護学実習後の学生の語りより,聖路加国際大学紀要,3,63-67,2017.
8. 増田美恵子,高島えり子,青柳優子,他:『周産期の看護』の授業におけるTeam-based learningの導入,医療看護研究,13(2),76-81,2017.
9. 福山智子:効果が上がる授業・演習の組み立て方

- と教材の工夫・活用法「母性看護学援助論」の実践例を通して,看護人材育成,13(6),71-77,2017.
10. 有森直子,桐原更織,石田真由美,他:新潟大学医学部保健学科看護学専攻科目「母性健康支援看護論」におけるアクティブラーニングの試み,新潟大学保健学雑誌,13(1),19-25,2016.
 11. 岡山久代,立岡弓子:リアルに体験できる分娩期ケアのロールプレイング演習 滋賀医科大学医学部看護学科での取り組み,滋賀母性衛生学会誌,16(1),27-33,2016.
 12. 中尾優子,吉留厚子,井上尚美,他:母性看護学教育でのディベート学習の試みとその評価 学生による質問紙調査より,鹿児島大学医学部保健学科紀要,26(1),67-72,2016.
 13. 志賀くに子:母性看護学における PBL 教育の実際と課題,秋田県母性衛生学会雑誌 24,40-46,2010.
 14. 三枝清美,大平肇子,村本淳子:看護教育における IBL (Inquiry Based Learning) IBL の実際 母性看護学,Quality Nursing,5(10),780-784,1999.
 15. 経済産業省 (2017): 人生 100 年時代の社会人基礎力 <<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>>
 16. 文部科学省中央教育審議会 (2008.12.24): 学士課程教育の構築に向けて (答申) <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf>
 17. 文部科学省中央教育審議会 (2012.8.28): 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申) <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf>
 18. Van Amburgh, J.A., Devlin, J.W., Kirwin, J.L., et al.: A tool for measuring active learning in the classroom. American Journal of Pharmaceutical Education,71(5),1-8,2007.
 19. 山地弘起: アクティブ・ラーニングとはなにか, 大学教育と情報, 2014 年度 (1), 2-7, 2014.
 20. Chuckering, A.W., Famson, A.F.: Seven principles for good practice in undergraduate education, AAHE Bulletin,37,3-7,1987.
 21. 総務省 (2019.7): 令和元年版 情報通信白書 第 4 章 第 6 節 ICT 利活用の推進 <<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/pdf/n4600000.pdf>>